【分類】安全・安心なまちづくり　【商圏】地域型

<高槻城北通商店街：高槻市>

安全に、安心して歩ける商店街から賑わいづくりに向けて！

～商店街を変えたい思い～

取組みの効果

◆飲食店を中心に１０店舗が新たに入居（他府県、他地区などから）

◆反社会的勢力の商店街への関与からの撤退

◆風俗店や客引きも姿を消し、関連の張り紙も消滅

◆ゴールデンウィークの賑わいの創出

取組みの内容

◆安全安心な商店街づくり

●街路灯の点灯時間の延長

●違法な立看板や風俗店関連張り紙の排除

●商店街並びに周辺への反社会的勢力の出入りを禁止

●警察との連携

◆※1高槻ジャズストリート（以下「TJS」）の実施

●有名ジャズ・ミュージシャンの招致

●※2テナントミックス

地域のにぎわいづくりのために始めた「TJS」で、中心的な役割を担う商店街理事長等が、出店希望者とオーナーを仲介しテナントミックスを実施

◆空き店舗への店舗誘致

〈商店街データ〉

■所在地　高槻市城北町 2 丁目１４－２７
■立地　阪急京都線高槻市駅から約５０m
■店舗数　５６店
■問合せ　高槻城北通商店街
理事長　北川潤一郎
Tel 072-674-0077

※1　**ＴＪＳ（高槻ジャズストリート）**：高槻を音楽あふれる明るく楽しい街にしようという思いから、1999 年に始まりました。毎年ゴールデンウィークの 2 日間、すべての会場が入場無料で誰でも気軽に音楽を楽しむことのできる日本最大級の手づくり音楽イベント。最大の特徴は、ボランティアによって企画、運営されていること。

※2　**テナントミックス**：商業集積活性化の基本となるコンセプトを実現するための、最適なテナント（業種業態）の組合せのこと。

取組みの背景

高槻城北通商店街は、阪急高槻市駅と国道 171 号線の間約 150m に約 50 軒のお店が並ぶ飲食店が多数を占める商店街で、周辺には高槻現代劇場や城跡公園などもあり、通勤・通学の人たちをはじめとした市内・外の多くの人たちの通

り道になっている。

同商店街は、バブル経済崩壊後（1991年頃以降）、経済環境が悪化、空き店舗が続出するようになった。しかし、店舗のオーナーには「再開発」への思いが根強く、往時の高い家賃水準の維持を思う向きもあったため、物販の商人には採算性から敬遠される状況でもあり、空き店舗は放置されていた。

同商店街は、駅前で、通勤・通学の通り道であったが、商店街には、反社会的勢力の関与する店も少なくなく、近隣大学では「近寄らないように」との指導までなされる状態であった。

また、組合員も減少し、店じまいも早くなり、経費節減のため午後９時半頃には、街路灯も消灯するような状況であったため、夜は暗く、軽犯罪も多発するようになり、通行量も大幅に減少していった。

城北通商店街は、20数年前までは、高槻まつりが商店街近隣の高槻城跡公園で開催されていたこともあり賑わっていたこともあったそうだが、高槻まつりの開催場所が変更され、商店街が閑散とするようになったそうである。

取組みのきっかけ

バブル経済崩壊後、約50軒あった商店街の店舗数が減少（約３０店）し、組合の財政状況も悪化し、また地元が期待を寄せていた「再開発」も組合解散という状況に陥り、さらに商店街内での軽犯罪も増加傾向であった。

地元の青年団は、そのような状況を変えたいとの思いが強く、また消灯が早く暗い商店街をとにかく街路灯を点灯し、明るくしてほしかったという。そういった青年団の願いもあり、旧役員から若手に託す形で、地元青年団を中心とする若手新役員への交代が行われたことが、安全・安心な商店街づくりのきっかけであった。

また若手のリーダー的存在であった現理事長は、TJSの取組みに関して、周辺の吹田市や枚方市には遊園地があり、5月のゴールデンウィークも賑わっていたが、ベッドタウンである高槻市は、郊外に行楽に出かける人で、逆に商店街が閑散としていた。ある年のゴールデンウィークに理事長が、商店街の仲間と商店街に人を呼ぶ方法はないかと話をしていたことが活性化取り組みのきっかけとなった。

活性化の要因

- ◆大阪府警、自治会、商店街の連携
- ◆やる気のある若手役員への交代
- ◆積極的な空き店舗への誘致
- ◆ＴＪＳ（高槻ジャズフェスティバル）

の無料開催

◆行政が、まちづくりの一環としてジャズフェスティバルを位置づけ

◆ボランティアの協力

事業の仕組み

- 大阪府警・自治会・商店街が連携して、取組みを行った。
- 違法看板の設置や張り紙をさせない。
- 空き店舗への出店アプローチとして、これまで空き店舗は不動産屋に任せきりであったが、飲食店向けに販売している酒屋に取引店舗を紹介してもらい、テナントミックスによる店舗誘致をすすめ会員獲得を図った。
- ＴＪＳの際に、高槻を訪れた他地区の店舗経営者から、商店街への出店につて理事長への問い合わせが相次いだため、理事長が出店者とオーナーの間に入り、賃貸借契約の交渉成立の調整を図った。
- ＴＪＳの実施に関しては、無料で実施することとしたため、行政がまちづくりの一環として位置づけたことにより、企業からの協賛や寄付の協力を求めやすくなった。

取組み上の工夫や苦労

商店街の財政は苦しかったが街路灯の点灯時間を延長し、犯罪の抑止に努めた。

店舗誘致では、組合が家賃交渉や担保保証を持つなど、空き店舗解消に組合として最大限の努力をした。

有名ジャズ・ミュージシャンの招致により、TJS のインパクトを強めるとともに集客効果を高めることができた。

まちをステージとして取り組むことで多く人に関心を持ってもらえるようにし、エリアでウエートが偏らないように工夫した。

めざす商店街像（今後の展望）

オリジナリティを出していきたいとのことである。

商店街は、飲食店が多く、車利用の顧客を獲得するため駐車場の整備をする人もいるが、駅に近いという立地を生かし通勤・通学で、商店街を通行している人に顧客となってもらえるように、魅力ある店舗を増やし、車利用のお客に頼らない店舗運営ができるようにしたい。い

わゆる車からの脱却を図りたいという。

「商店街内の道路は５～６メートルで、その狭い道幅に歩行者だけでなく、自転車、バイク、自動車が集中して通行している。そのため、商店街ではさらなる環境向上のために、交通問題の解決が必要」と考えている。

これまで行った「高槻城北通交通社会実験」の結果も踏まえつつ、安全にそして安心して通行できる道路にするための取組みをしていきたいとのことである。

朝の通勤・通学時の商店街の様子

こぼれ話(失敗談)

初めてのＴＪＳ開催は、スタッフが 20 人で、大成功に終わったそうである。翌年、ボランティアスタッフを募集したところ、200 人が集まったそうである。しかし、スタッフが多くなると評論家となる人がいたり、自分の意見が通らないで辞めていく人もいたそうである。

逆に主張は強くないが主婦や学生のボランティアの方は、戦力となったとのことであった。

取材を通して

今回、高槻城北通商店街を取材させていただいた北川理事長は、商店街だけではなく街全体の将来像を考えているように思えました。

その根本には、生活の場である商店街を非常に大事に思うとともに、街を愛していると感じました。

もし、他の商店街で、安全・安心の取り組みとして、商店街並びに周辺への反社会的勢力の出入りを禁止しようとする商店街が実際にあれば、取組みの詳細をお話させていただくとのことでした。

また、TJS で有名ジャズニストを呼ぼうと決めたときのお話（追っかけのようにコンサートに出かけ直談判をしたことなど）を伺い、やろうと決めたことに対しては、ものすごい情熱をもって努力されるとともに、その実行力にただ驚かされるばかりでした。

そういった北川理事長の行動力が、過去の様子をまったく感じさせない商店街に変貌する原動力となったことは間違いありません。

また、TJS を高槻市の一大イベントへと発展させたのも理事長の行動力に触発された商店街組合員が、一致団結して取り組まれたことによるものだと感じました。